

一章

- (1) 十二巻本についての資料は角田泰隆氏の「十二巻本『正法眼蔵』の研究動向」に詳しいが、この論文で参考したのは、それが載っている「十二巻本『正法眼蔵』の諸問題」(鏡島元隆・鈴木格禪編、大蔵出版、1991、以下「諸問題」と略記)、「ブツダから道元へ」(奈良康明監修、東京書籍、1992)、「本覚思想批判」(袴谷憲昭、大蔵出版、1989)などである。
- (2) 鏡島元隆「十二巻本『正法眼蔵』の位置づけ」(「諸問題」七頁以下)
- (3) 袴谷憲昭『ブツダから道元へ』二四四頁
- (4) この点については伊藤秀憲氏が述べているのと同じ理由である。「諸問題」三八八頁
- (5) 池田魯参氏は、「出家」と「出家功德」(「受戒」の間にさえ、書き改めを認めないで、書き改めは「三時業」の巻のような例をいう)「新草十二巻『正法眼蔵』の構想と課題」(「諸問題」三〇六頁)というが、それは再治である。もちろん、課題がちがうからこそ再治ではなく書き改めが必要だったのである。
- (6) 一六九〇年(元禄三年)、編集。七十五巻本を基本として、それに六〇巻本にある九巻(十二巻本の内七巻と「法華転法華」(「菩提薩捶四攝法」)を加えた梵清本八十四巻に、秘密「正法眼蔵」中の八巻(十二巻本の内四巻と「後心不可得」「示庫院文」(「唯仏与仏」(「道心」)を加え、さらに「弁道話」と「生死」「重雲堂式」を加えて九五巻となる。「百八法明門」のみが欠ける。
- (7) 河村孝道『ブツダから道元へ』二二二頁
- (8) 鏡島元隆、前引書二四頁
- (9) 杉尾守「道元の哲学・上」(山科大学教育学部研究論叢第一〇巻第一号、1970、一二〇頁)

(10) これは清水英夫「十二巻本『正法眼蔵』」第八、「三時業」についてからの引用である。(「諸問題」三三三頁)

(11) これは秘密「正法眼蔵」では、「仏道」であったが、本山版九十五巻本で「道心」と改題。七十五巻本に内容のまったく異なる「仏道」があるので、紛らわしいため、ここでは「道心」とする。

(12) 杉尾玄有「風と月と仏」十二巻本『正法眼蔵』はどこへいく」(「諸問題」所収)、中島志郎「道元十二巻本『正法眼蔵』試論」(禅文化研究所・紀要第一巻、1991、5)などで論じられている。

(13) 旧草の内、七十五巻本はそのままの配列では編集意図、時期について諸説があり、今はそれを見定めえない。だがその巻々はほとんど示衆(記述)年代がはっきりしており、そこに思想の変化は大きく読み取れる。したがって示衆年代に並べ直して、その変化を考えて、十二巻本との関係を問うべきであろう。

(14) この解釈について、鏡島氏はこれを十二巻本眼蔵の意味にとるのは論者の思い込みに過ぎない(前引書六頁)といい、石井修道氏も同様に第十二巻ととる。(「諸問題」三三二頁)しかし、池田魯参氏は「十二巻全体を指す語と見るのが穏当であろう」(前引書二九三頁)と結論する。清水英夫氏もそうである。(「諸問題」三三二頁)私は、直前の文に「二百巻の御草を拝見せざること」とあるのと併せて見て、字義どおり十二巻と取る。

二章

- (1) 「永平広録」358
- (2) 石井修道「最後の道元十二巻本『正法眼蔵』と『宝慶記』」(「諸問題」所収)三五三頁以下には、坐禪が、鎌倉から帰って以後の上堂で何度も説かれていることが指摘されている。なお、松本史朗氏は「初期の道元には坐禪を非常に強調する傾向が認められる。……それが十二巻本においては逆転する」(「深信因果について」『諸問題』二二七頁)というが、初期の道元と比べられるのは、晩期の道元であって、それを十二巻本に限定するのは問題を歪める。

- (3) 十二巻本の引用経論については、石井修道氏の前引書三二七頁に詳しい。
- (4) 十二巻本を新戒・初心晩学の為に書かれたと見るのは、河村孝道「十二巻本『正法眼蔵』について」『諸問題』四二四頁、中島志郎（前引書一五〇頁）伊藤秀憲（「十二巻本『正法眼蔵』について」）など。

### 三章

- (1) 石井修道、前引書、三三五頁
- (2) 松本史朗、前引書、二三四頁。ところで松本氏は道元の三世因果の道理を「原始仏教以来の縁起説の真義を捉えたものと評価する」（二三〇頁）というが、縁起を時間的にとらえるのは、一つの解釈であって、それが原始仏教の真義かどうかは、問題であると思う。
- (3) 石井修道、前引書、三一九頁以下
- (4) 袴谷憲昭『ブツダから道元へ』二二四頁
- (5) 石井修道、前引書、三五六頁
- (6) 杉尾玄有氏は、この箇所をもって、道元が因果の中断を説いており、それは論理的に因果不落になるゆえ、深信因果の因果観は（大修行）のそれと、ついに一つになるべきもののように思われるという。（「十二巻本『正法眼蔵』はどこへ行くか」『諸問題』六六頁）しかし、そのような弁証法は、他の十二巻本を考えても成り立つ余地がない。
- (7) 袴谷憲昭「十二巻本『正法眼蔵』と懺悔の問題」（『諸問題』一三八頁以下）で、懺悔の原語や中国の思想系譜について述べているが、『涅槃経』や浄土思想に触れられないのは残念である。
- (8) 大正蔵経第一〇巻、四八三頁c、四八四頁b、またここには、「王、元、国を貪して父王を逆害す。貪狂心の作すなり云何が罪を得ん」を初めとしてさまざまな角度から、阿闍世に罪がないと、世尊に言わせている。
- (9) 清水英夫、前引書三二頁以下

- (10) 中島志郎、前引書、一五一頁

(11) 松本史朗、前引書、二一七頁以下。だが松本氏の解釈も同意できないところがある。「思考の能力（意根）を坐禅によって断ち切れば、忽然として悟るであろう」などといえまい。意根とは思考の能力ではない。得見道は悟りではない。（「三十七品菩提分法」で「坐禅これ正思惟」といわれ、（坐禅蔵）で「兀地の向上なによりてか通ぜざる。賤近の愚にあらずは兀地を問著する力量あるべし、思量あるべし」といわれることだけでも、そんな簡単なことではないことがわからう。また道元が無学であるなどといったことはない。「法もし身心に充足すれば、ひとかたはたらずとおほゆるなり」（『現成公案』）と言われるとおり、分かれれば分かるだけ、分らないことが多くなるのは、仏法でも同じである。

(12) 杉尾玄有氏は「そのような四禪比丘的な慢心への戒めが（四馬）と前後して説かれたということは、そういう増上慢の弟子が道元門下にはびこって、何か危機的な状況をすら生みだしつつあったことを意味するのではあるまいか」（『諸問題』七五頁）と述べておられる。たしかに危機的な状況は考えられるが、それが四禪比丘のような驕慢とは思えない。むしろ道元自身が、その問題を感じたのではなからうか。

(13) 杉尾氏は、鞭影で気付く馬と鞭を必要としない馬とを分け、三種の馬としているが、特に鞭影と鞭を必要としない馬との意味のある區別を論じているわけではなく「鞭影馬・千里馬」（十回も！）と一括しているのだから、二種で問題なからう。

(14) 杉尾氏は、「いまはただ今生のことだけを考えようとするのだから」というが、十二巻本の道元は、今生のことだけ考えていたとはいえない。（『諸問題』八四頁）

(15) 角田泰隆氏は、この箇所とその前の拮針比丘についての言葉をもって、道元は待悟でも有所得でも報をもとめるのではないというが、十二巻本のたった一巻の二箇所だけでは、とても論拠にはならない。（「十二巻本の性格」『諸問題』四五二頁）

- (16) 伊藤秀憲氏「十二巻本『正法眼蔵』の撰述とその意図について」  
 (『諸問題』三七九頁以下)、および角田泰隆「十二巻本の性格」  
 (『諸問題』四二八頁)など。

(17) 伊藤秀憲、前引書、三八二頁以下

- (18) 角田氏は、〈出家功德〉で「『出家受戒』という熟語が十数回にわたって用いられ、出家と受戒が一体のものとして示され」(『諸問題』四三二頁)ているとし、その出家受戒という観点から十二巻本を統一的に解釈しようとする。けれども、それでは在家はまったく無視されたのだろうか。ことに〈袈裟功德〉はそれで通せるだろうか。

- (19) 十二巻本を、初心出家の為に説かれたものとする解釈がある。例えば河村孝道氏は「出家・受戒・著衣せる新戒の出家学道者」に対して説かれたといひ(『諸問題』四二四頁)、角田氏は出家受戒が得道の出発点(『諸問題』四四二頁)といひ、永光本奥書の初戒比丘から入門の弟子がまず学んだかもしれないとする。

#### 四章

(1) 袴谷憲昭「本覚思想批判」四〇六頁

- (2) 袴谷憲昭、前引書、四〇六頁、この時期に関しては伊藤氏が批判して訂正している。(『諸問題』三八九頁)

(3) 伊藤秀憲、前引書(『諸問題』三九〇頁)

(4) 「道元上」七四頁、頭注(日本思想体系、岩波書店)

(5) 伊藤秀憲、前引書、三九二頁

(6) 袴谷憲昭、前引書、四〇六頁

- (7) 角田泰隆氏は、十二巻本の性格を「菩提への道」「はるかな道」としている。前引書(『諸問題』四四〇頁以下)